

科学研究費補助金（基盤研究B）事業

中東・アジアのイスラーム系宗教大学の留学生獲得戦略——知のグローバル化とローカル化

西村 淳一

早稲田大学イスラーム地域研究機構
主任研究員

一 事業の概要

早稲田大学イスラーム地域研究機構は、二〇一二年より研究活動の一部を、桜井啓子機構長が研究代表をつとめる科研費（基盤B）事業「中東・アジアのイスラーム系宗教大学の留学生獲得戦略・知のグローバル化とローカル化」——以下「科研事業」と略記——との共催で実施している。この科研事業の狙いは、留学生の受け入れや海外展開を通じて次世代ムスリムの育成に多大な影響力をもっているイスラーム系宗教大学に着目し、「知」の伝播と受容、変容という側面から、現代的なイスラームの知の全体像を描き出すことにある。具体的な目標については本誌第五号（二七四～六頁）に記したのでそちらをご参照いただきたい。以下では二〇一四年度中に実施された本事業の活動について報告する。（なおこの報告は二〇一五年二月中

旬に執筆されており、同年三月の活動については予定を記していることをご了承ください。）

二 出版活動

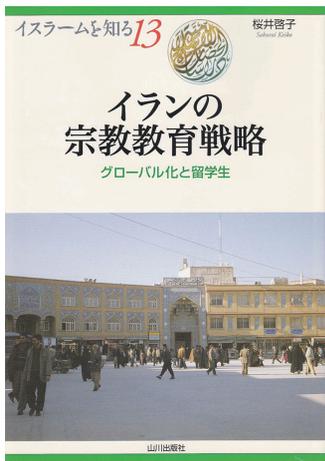
本年度は非常に大きな成果が得られた。第一に、研究代表の桜井啓子氏による『イランの宗教教育戦略——グローバル化と留学生』と題する一般向けの著作が、山川出版社の「イスラームを知る」シリーズの第一三巻として、二〇一四年八月に出版された（本書の詳細については、本誌の「新

刊紹介」欄の記事や、以下のウェブサイトを参照：<http://www.yamakawa.co.jp/product/detail/2310/>。

第二に、二〇一二年八月にオックスフォード大学で実施した国際会議「宗教教育機関とムスリム社会の変化・アズハル大学、マディーナ大学、ムスタファー大学がもつ世界規模の影響力」（詳細は本誌第五号の報告を参照）の報告原稿を取りまとめた論文集 Masooda Bano & Keiko Sakurai eds., *Shipping Global Islamic Discourses* が、二〇一五年三月にエジンバラ大学出版局より出版・公開される（本書の詳細については以下のウェブサイトを参照：<http://www.eupublishing.com/book/9780748696857>）。

三 海外調査

① 二〇一四年九月一日～八日の間、桜井啓子氏およびフマーユーン・カビル氏（広島大学国際協力研究科・PD研究員／本科研事業・研究協力者）がバンングラデシュにて調査を実施した。その目的は、バンングラデシュのシーア派コミュニティの歴史と現状を調査し、その規模や特徴を明らかにしたうえで、バンングラデシュ出身のシーア派宗教指導者たちにインタビューをし、シーア派の若者たちの宗教教育の現状や海外に留学した宗教指導者たちの役割を明らかにすることであった。実際には、ダッカ市内にある宗教施設ホセイニー・ダーラーンやその他のシーア派宗教施設を訪問し、それらの宗教指導者にインタビュー調査を行っ



た。その結果、ダッカとクルナにシーア派の宗教専門教育機関があることが明らかになった。また現在、バングラデシュで活躍している宗教指導者の多くがイランのゴムで宗教教育を受けた人たちであり、一九八〇年代中ごろに留学して二〇年以上、イランで学んだという宗教指導者二名から留学体験を聞くことができた。以上の調査を通じてバングラデシュにおけるシーア派の教育活動の状況がある程度、把握することができた。

② 二〇一四年九月五日～一六日の間、西村淳一がフランスのパリにて調査を実施した。その目的は、中世イスラーム世界の教育制度や教育機関について、フランスでの



ダッカのシーア派宗教施設ホセイニー・ダーラーン

研究状況を把握すること、および有用なアラビア語一次史料を調査すること、であった。実際には、アラブ世界研究所、ルーブル美術館、およびパリ市内各地に点在する書店を巡り、関連する書籍を入手することができた。またフランス国立図書館にてアラビア語写本の調査を行い、その複写データを入手することができた。なおアラブ世界研究所では、二〇一三年九月～二〇一四年一月の間、「英知の光・東洋と西洋における中世の学校」と題する展示会が行われたが、それに伴い出版されたカタログからは、フランスにおける中世イスラーム世界の教育制度や教育機関に関する研究の最近の傾向が垣間見られ、興味深い。



ホセイニー・ダーラーンに集まった女性たち

③ 二〇一四年一〇月一六日～二八日の間、オマール・ファールーク氏（広島市立大学・名誉教授／本科研事業・研究分担者）が中国の雲南省および海南省にて調査を実施した。その目的は、同地におけるイスラーム教育の現状とその役割を把握することであった。諸事情により詳細な報告の公開は控えるが、昆明、沙甸、海口、三亜などを巡り、雲南大学、海南大学等の高等教育機関や各地のモスクなどを訪問して、現地のムスリムからイスラーム教育に関する情報を得ることができた。なお同地では留学生の行き来を通じての東南アジアとの交流も散見された。

④ 二〇一四年一二月二四日～二〇一五年



ホセイニー・ダーラーンの敷地内にあるマドラサ



ホセイニー・ダーラーン内に収められているシーア派第2代イマーム・ハサンと第3代イマーム・ホセインの墓のレプリカ

一月五日の間、鈴木恵美氏（本機構・招聘
研究員／本科研事業・研究分担者）がエジ
プトのカイロにて調査を実施した。その目
的は、スンナ派イスラーム世界の権威であ
るアズハル機構の教育機関、アズハル大学
の留学生に対しインタビュー調査を実施す
ること、および現地の大学図書館にて近代
のアズハルに関する資料を収集すること、
であった。エジプトでは二〇一三年七月の
軍部によるクーデター以降、親ムスリム同
胞団派の学生と治安当局の間で激しい衝突
が続いている。本調査で実施したインドネ
シアとマレーシアの留学生へのインタビュ
ーを通じて、二〇一三年八月以降、多くの留
学生がいったん帰国したことを確認でき

た。二〇一一年まで増加傾向にあった留学
生の数は、今後は伸び悩むことが予見され
る。資料収集のほうは、カイロ・アメリカ
ン大学図書館において、一九二〇〜五〇年
代にかけて出版された雑誌『ヒラール』を
調査し、アズハルと当時の政権の関係を知
るうえで貴重な記事を収集することができ
た。

以上の海外調査の報告については、本科
研事業用ウェブサイト (<http://www.kikou.waseda.ac.jp/ias/research/kaken.php>) でも確
認することができる。

四 第四回研究会

二〇一四年一月二六日、早稲田大学
二六号館五〇二教室にて、第四回研究会を
開催した。人間文化研究機構（NIHU）
プログラム 地域研究間連携研究の推進事
業「南アジアとイスラーム」との共催で実
施された本研究会では、「南アジア世界に
おけるシーア派イスラームの展開」と題し
て、以下の研究者四名が発表を行った。

（一）桜井啓子「バングラデシユのシーア派
——イランとの関係を中心に」

- （二）黒田賢治（日本学術振興会・特別研
究員／本科研事業・研究協力者）「イン
ド・ムンバイ市におけるシーア派——新秩
序形成とイラン国家」
- （三）榎和良（北海道武蔵女子短期大学・
講師）「交差する空間——インドの思想文
化史におけるシーア派イスラーム」
- （四）二宮文子（青山学院大学・准教授）

「スーフィーとシーア派——南アジアにお
ける関係の概観」

本研究会の内容については、小倉智史氏
（京都大学・博士課程）による詳細な報告
（http://www.asaras.kyoto-u.ac.jp/kias/ias_indas/2014116.html）があるので、そちら
をご覧ください。

五 今後の予定

本科研事業では、最終年度となる来年
度、活動を総括する二回の研究会を実施す
る予定である。機構ホームページやイス
ラーム地域研究メーリングリストなどを通
じて事前に告知を行うので、ご関心をお持ち
の方にはぜひともご参加いただければ幸
いである。